足立租税教育推進協議会　会長賞

「ペンが紡ぐ社会の循環」

足立区立　渕江中学校

三年　金本　佑也

私たちが普段書店で見かける小説や漫画。お気に入りの一冊を手にとり、その世界に没頭する時間は何物にも代えがたい。私は昨年の九月から読書に没頭しており、将来は自分の物語を書いてみたいという夢もある。そんな中税について考える機会があり、ふと疑問に思ったことがある。それは、作家の収入である「印税」にはどのような税金がかかっていて、どのように社会に還元されているのか、ということだ。

第一に、印税とは何か。印税という言葉には「税」がついているから、税金の一種だと思っていた。しかし実際には印税は税金ではないことが分かった。印税とは本の売れ行きに応じて出版社から作家に支払われる著作権の使用料のことで、一般的に本の定価の十パーセント前後が作家に支払われる。一見、これは単なる「個人の収入」で、税金とは直接関係ないように思えるが調べてみると、実に密接な税金の仕組みが隠されていた。

作家が印税を受け取る際、あらかじめ所得税が差し引かれる「源泉徴収」という仕組みがある。更に、印税額が大きくなると税率が高くなる「累進課税」が適応されるらしい。また、私たちが本を買うときだけでなく、出版社と作家の間での取引にも「消費税」が関わっている。

ではこのようにして本を介して集められた税金はどこへ行くの

だろうか。それは私たちが読書や学びを楽しむ環境そのものに還元されている。その象徴が、図書館である。誰もが無料で本を借りられる場所は、全て国民が納めた税金で維持されている。誰かが本を買い、作家が印税を得て税金を納め、その税金が巡り巡って次世代が本を読む環境を整える。この「税の循環」があるからこそ、経済的な格差に関わらず、全ての人が知識や文化に触れられるのだ。教科書の無料配布や学校の図書館についても同様に、もし税金という仕組みがなければ本を読むことや、学ぶことが一部の限られた人だけの特権になるかもしれない。文化や芸術が豊かな社会を維持するためには税金の支えが不可欠なのだと実感した。

今回、印税というテーマから税金について考えたことで、私の意識は一変した。税金とは義務として「ただ徴収されるもの」ではなく、私たちが愛する文化を守り、社会を発展させていくための「未来への投資」なのだと私は思った。

将来もし自分が書いた本で印税をもらえるような作家になれたとしたら、その時は、私に読書を与えてくれた社会に感謝の気持ちを持ち、誇りをもって税金を納めたい。私の納めた税金が未来の誰かの知的好奇心を刺激し、新たな文化を育てる礎になるのなら、これほど素晴らしいことはない。一冊の本が持つ価値と、それを循環させてくれる税金のありがたみを胸に、これからも社会との繋がりを意識し続けていきたい。